

第70回 日文研フォーラム



# 根 付

—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に—

## Netsuke

— In the Collection of the State Hermitage Museum —



ミハイル・ウスペンスキー

Dr. Michail V. Uspensky

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄





● テーマ ●

## 根 付

Netsuke

—In the Collection of the State Hermitage Museum—

—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に—

● 発表者 ●

ミハイル・ウスペンスキー

Dr. Michail V. Uspensky

Curator, the State Hermitage Museum

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for  
Japanese Studies



1995年1月10日(火)

### 発表者紹介

ミハイル・ウスペンスキー

Dr. Michail V. Uspensky

エルミタージュ美術館学芸員

Curator, the State Hermitage Museum

1953年生まれ。1975年、絵画彫刻建築専門学校（大学相当）。1982年絵画彫刻建築専門学校博士課程修了。同校より博士号取得。1982年より現在まで、国立エルミタージュ美術館上級学芸員。1994年4月より1995年3月まで、日本国際日本文化研究センター客員助教授として来日。専門は日本美術史。

### 主な著作：

Monograph: Netsuke, Leningrad: Iskusstvo, 1984

Catalogue: Netsuke and Woodblock Prints from the Collection of S. P. Varshavsky, Leningrad: Iskusstvo, 1985  
Japanese Woodblock Prints of the Classical Period, Leningrad: Aurora, 1989

One Hundred Views of Edo by Ando Hiroshige, Leningrad: Aurora, 1990

"Seichu gishiden by Kuniyoshi and Ukiyo-e Hanga during the Tempo Reforms," in Proceedings of the Oriental Museum: The Chonin Culture of the East, Moscow: Nauka, 1990

"Japanese Woodblock Prints and Nishiki-e Shinbun," in The Materials of the Conference on the Problems of Eastern Art, Krasnoyarsk, 1989

根付は、日本にとって代表的な工芸品であるにもかかわらず、数年前まで、根付に関する文献はわずかしかありませんでした。それが、現在では雑誌に論文が発表されたり、展覧会のカタログが出されたり、専門的な研究がおこなわれるようになってきました。

根付研究の先頭に立ったのは、一九世紀後半から二十世紀前半にかけての上田令吉先生の『根付の研究』という本で、この本は、一九七〇年に英語に翻訳され、今もなお、価値を持ち続けている優れた本です。

それでは、根付とはどういうものか、というお話をしましょう。

ご存知のとおり、根付は小さく細かい彫刻 (miniature) の一種です。そしてこれは、物を腰につけるための特別な装具です。紐をたばこ入れとか、印籠とか、鍵とかに結び、その反対側の端に根付をつけました。

根付には、いろいろな形があります。たとえば、まんじゅう、鏡蓋、さし、箱、帯ぐるわ、などがあります。なかでも一番人気のあったのが形彫で、これは細かく彫りあげた彫像を意味します。

昔から根付は日本独自のものと思われてきましたが、この起源は実に複雑です。根付のような装具は、世界のあちらこちら、たとえば、ハンガリーとか、北シベ

リアとか、アフリカなどにも見るができます。

日本に根付が登場したのは、わりあい遅い時期で、一六世紀末頃でした。

根付が登場するまでは、火打ち袋などを刀剣の柄に結んでいました。この習慣については『古事記』にも述べられていますし、桃山時代に至るまでの絵画に登場することから知ることができます。しかし、一六世紀末にすべてが変わりました。

まず、これは有名な豊臣秀吉の「刀狩」という改革でした。その改革の結果、それ以後日本人は全部、さむらいを除いて刀をおびることはきびしく禁止されることになりました。

同じ時期に、秀吉の「朝鮮征伐」により、日本人は大陸、すなわち中国の文化や風俗と深くかわるようになり、多くの影響を受けることになります。そのひとつが根付でした。中国では少なくとも一三世紀頃から、墜子とか、佩陞とか呼ばれる、いわゆる日本の根付にあたる装具がありました。

さて、根付は日本では一六世紀末頃に用いられ始めたわけですが、最も早い時期のものは全く現存しておらず、文献の記述からうかがい知ることができるだけです。この文献とは、大阪の稲葉通龍という人が書いた『装剣奇賞』という五冊

からなる本で、天明元年といえますから、一七八一年に出版された、初めて根付について書かれた本ということになります。面白いのは、この本に登場する初期の日本の根付というのが、「唐彫」と「唐物」に代表されるということでしょう。さらに、根付師の名前も、この本にはちゃんと書かれていて、その作品については挿絵から知ることができます。普段、我々が見ることのできる作品は、残念ながら一八世紀後半のものなのです。

確かに一八世紀から一九世紀にかけては根付の全盛期で、通常、根付の「黄金時代」と呼ばれています。この時期、最もはやった様式は形彫で、材料としては木材と象牙。木材の中でも黄楊と檜は特に好まれました。

さて、作品の主題ですが、私の考えでは、根付の研究で一番面白いのが、この主題です。

主題の研究を始めみると本当に多岐にわたっており、日本と中国の歴史や芝居、文学、宗教、風俗、習慣、生活の場面などに深く関わっていて、本当に興味深いものです。根付は、江戸時代の日本の生活大百科事典と言っても過言ではないと思います。

根付の主題について話したいのですが、視覚資料としてエルミタージュ美術館収蔵の作品を使用したいので、まず簡単に当館のコレクションについて説明したいと思います。

ヨーロッパとロシアでの根付の収集は一九世紀後半に始まりました。

最初の根付のコレクションは西洋に出現したという意見が広く知られています。これは正しいですが、例外が一つあります。おそらくとも一九世紀前半に根付はお洒落なものとなり、多くの町人は季節や祭りなどに関連してたくさん根付を集め、コレクションのように扱っていました。

しかし、根付の本格的な収集と研究はヨーロッパで始まりました。

開港の後で日本に現れた西洋の水兵は根付が大好きでした。日本のおみやげとしてよく買いました。このことに日本人はすぐに気付き、だんだん根付の販売体制を整えて行きました。

このビジネスの創始者は三河屋幸三郎という浦賀の人でした。

色々な困難をへて、彼はついに東京の神田に自分のお店を開き、根付の商売を始めました。

次に同じような店が所々に開かれ始めました。日本だけではなく、ヨーロッパ

にも沢山現れ、とくにペテルブルグではZesky大通りに、日露戦争前に「日本」(ヤポニヤ)というお店が出来ました。これは「えざきや」という有名な長崎のべっこうやの支店でした。今もこのえざきやは長崎に存在しています。おもしろいことに「えざきやきちべい」はニコライ二世の御用商人でした。

結局、ヨーロッパとアメリカに大きなコレクションが収集されて行きました。その中に現代のエルミタージュのコレクションがあります。

最初のコレクターは最初の根付の研究者でした。たとえば二十世紀の初めのジョリ(Joly)、ジョナス(Jonas)、ブロックハウス(Brockhaus)、や現代のブシェル(Bu shell)、ラザルニック(Lazarick)、マイネルザゲン(Mainertzhagen)等です。

近頃、同様のコレクターが日本にも現れました。たとえば、関戸健吾氏と稲垣規一氏、渡辺正憲氏、その他です。高円宮憲仁親王殿下は現代根付師の作品を収集しています。

エルミタージュ美術館での根付の収集は十月革命の後に始まりました。

一九一七年以前には日本美術部という特別の部は存在しませんでした。いわゆる東洋文化部は一九二〇年に組織されました。

この根付コレクションの中心は、一九二五年にステーグリッツ男爵の根付コレ

クションが移譲されたものです。これにアレクサンドル三世のロシア美術館の民族学部からの根付が数点加えられました。

第二次世界戦中レーニングラード封鎖の時に日本美術のコレクションはエルミタージュ美術館に残りました。そのためにある作品は被害をこうむりました。しかし、さいわいに、このような作品はわりあい少なく、大部分のコレクションは無事に保存されておりました。

大戦の後も当館の根付のコレクションは増加しつづけ、今では二千点ぐらいになっています。

さて、根付の主題について、考えてみたいと思います。まず、宗教にかかわる主題についてお話ししましょう。

私が大変面白いと思うのは、根付の題材に、お寺などで見られる仏像がほとんどないことです。根付に見られる最も人気のあった宗教的な主人公は七福神、すなわち、恵比須、大黒、毘沙門天、弁財天、布袋和尚、福祿寿、寿老人でした。七福神は、日本の代表的なものだと思われていますが、実は、恵比須を除くすべては、海外から輸入されたものです。



たとえば大黒天は、マハカーラ(Mahakala)というインドの神様です。怒りの神として三面(三つの顔)と六つ手(六本の手)の恐ろしい神として描かれていました。しかし、大黒天は怒りの神であると同時に守護神でもあり、富の神でもありました。

このマハーカーラは、中国に伝わると、次第に福や富の神の性質だけが残るようになっていきました。表情も、当初の怒りの表情から次第に変化し、日本に伝わり、定着する頃には、すっかり恐ろしい表情は消えてしまっていました。

日本では、大黒天は福の神として平安時代後期から登場しています。太宰府の観世音寺には、一一世紀の大黒像を見ることができます。

根付には、大黒は福の神としてだけ現われ、親切で愉快的な、福と富を与えてくれる神として描かれています。

福祿寿も、その起源は外国の神で、中国の三つの独立した神からなっていました。すなわち、福星と禄星と寿星で、福、禄、寿です。日本では、この三つが一つになって、福祿寿となりました。

根付には、中国の教えがよく反映されています。たとえば、道教の人物、仙人などが頻繁に主題として選ばれています。仙人などは、本当に信じられないくら

多いです。この理由にはいろいろあると思いますが、まず一つ考えられることは、一八世紀後半から流行した絵本の影響です。絵本には、しばしば道教の人物が登場します。このような絵本の描写は、根付師のよき手本となりました。『三才図絵』、『山海経』、『列仙全伝』なども根付師の手本として重要な役割を果たしています。しかし、最も大きな影響を与えたのは、間違いなく『北斎漫画』だと思います。当時の日本では、主に漢字、すなわち学者などの知識人は、みんな漢籍を読み、中国古今の事情に通じていたと思われるですが、町人など一般の人々の間には漢字は普及しておらず、読める人は少なかったと思います。それで、それらの漢籍や古典を絵に描いたり、根付として表現したりして、翻訳理解していたのです。

仙人の中では、蝦蟇仙人のものが一番多く見られます。中国の思想は、根付にさまざまな形で反映され、道教だけでなく、儒教に関する題材もたくさん見られます。

「二十四考」も非常に人気がありました。ご存じの通り、二十四考は一三世紀（元時代）に中国に現れたものです。居敬筆の『全相二十四考詩選』という本が出版されたことによります。この本には挿絵があり、一四世紀頃の日本の作家や画

家の手本となりました。二十四考が根付に最もよく反映された例としては、剡子、唐夫人、孟宗でしょう。

剡子の物語は、よく知られているかもしれませんが、簡単にお話ししましょう。

ある時、剡子のお母さんが病気になりました。お医者様は、手のほどこしやうがないが、赤い鹿の乳を飲めば良くなるでしょうと言いました。そこで剡子はすぐさま手桶をとり、自分は鹿に変装して山へ出かけました。様々な困難を経て、剡子はいいに赤い鹿の乳を手に入れ、母親の病気は全快したというものです。こういうわけで、剡子は、鹿の皮をひっかけ、手桶を持っている姿に描かれています。寿之と言う一九世紀の彫刻家の作品は剡子の根付の代表的なものです。

さて、次のお話は迷信とつながりがあるかもしれませんが。

しばしば根付には象のような動物が描かれています。実はこれは象ではありません。何かと言いますと、獾です。百科事典によると、獾という言葉は実在の動物を示しています。“*tapir*”という動物です。しかし、「獾」にはもう一つ意味があって、悪い夢を食べて生きているという神話的空想の産物です。この話は、みなさんも良くご存じだと思います。「獾」が日本の正月の風俗に関係を持っているからです。

この「獺」は、桃山時代に日本に伝わったと思われます。秀吉の有名な家臣に加藤清正公がいます。加藤清正が「朝鮮征伐」に行ったおり、「獺枕」という物を持って帰りました。獺を型どった枕という意味です。夢を喰う獺を枕にして寝ると、よく眠れるというわけです。現在の日本では、「獺」と、安眠について、何か迷信のようなものがまだ残っていますか？

少なくとも、二十世紀初期まで、人々は、悪い夢を見て目が覚めたら「バク喰らえ、バク喰らえ」と唱えたと言われています。

色々な根付が、その迷信を表現しています。すなわち、獺の上に乗って、人が非常によく眠っている姿です。

日本でよく知られた人物ですが起源が大陸のものもあります。狸々です。中国の『山海經』という文献に出てくる人物で、紀元前四―一世紀頃といえますから、非常に古い人物です。『山海經』にも、その他の文献においても、狸々のことは次のように説明されています。狸々は人間に似てはいたけれども、人間ではなかった。そして、長い赤毛の髪と細い声をもっていて、贅沢な衣を好み、お酒が大好きだった。

一六一三年に長崎で出版された「日本辞書」(Vocabulario da Lingoa de Japan)

という日本・ポルトガル語辞典では、「猩々」という言葉は「のんだくれ」と訳されています。この辞典は、だいたい当時の口語体を記録したものと考えられるので、桃山―江戸時代には、この「猩々」という言葉が「のんだくれ」という意味で用いられていたことが想像できます。このことを、根付が明らかにしてくれま

す。

根付の最もはやったテーマの一つに鬼があります。根付師は鬼の姿を描くのが好きでした。けれども、江戸時代の鬼の表情は複雑です。このような複雑な鬼の表情を生み出したのには、インドの信仰と仏教と、神道の概念と、道教の思想が影響しています。

たとえば、ご存じの通り、道教には「鬼の門」という思想があります。

「鬼の門」は東北にあると信じられていますから、この方向は不吉な方向とされ、「丑寅」の方角と名付けられています。そして鬼の住居があるとされています。それで、江戸時代の美術には鬼が登場すると、いつも虎の皮の褌と角という特徴をもって描かれています。

たとえば、ある作品には、鬼が座って鏡を見ています。恐ろしいというより、かわいらしい鬼です。鏡を見ながら角をつかんで、おめかしでもしているのでしょ

うか。

どうして根付では、鬼は愛らしく描かれるのでしょうか。

この事を他の「鬼の主題」が説明してくれると思います。鬼と坊主です。よく見ると、このお坊さんは鬼の角を切り取っています。言いかえると、鬼が出家しているところが描かれているのです。鬼が鬼らしく描かれていないのは、どういうことかという、笑いの対象として描かれているのです。

悪の化身であるはずの鬼が、善の道、正しい道を歩こうとしている。ある根付には、鬼が木魚を叩きながら念仏を唱えています。

ここではすべてが反対に表現されています。恐いものがおかしいものに表現されています。このような表現は、西ヨーロッパの謝肉祭の文化などにも知られており、笑いの文化として論じることができます。江戸時代の町人文化はだいたい笑いの文化と言えます。根付も、この笑いの文化に属していると思います。

根付にとって鍾馗も非常に人気のあるテーマでした。鍾馗には、鬼とか悪魔を追放するといった意味があります。鍾馗は中国の伝説のなかの人物です。鍾馗の伝説の一部を簡単にご紹介します。鍾馗は、大変優れた才能の持ち主で、優秀な知識を備えた学者でしたが、ある試験を受けて失敗します。その理由は、彼の容

貌が醜いからというものでした。彼はその屈辱に堪えることができずに自殺してしまふわけですが、玄宗皇帝がたいそう悪夢に悩まされていたとき、悪魔を追ひ払ったのが鍾馗だとも伝えられています。それで、以来、鍾馗は中国では悪魔に對する守り神となりました。日本の民間信仰においても、やはり鍾馗は同じ役割を果たしています。しかし、鬼と同様に鍾馗も、守り神であるとかの民間信仰的な意味あいなしで根付に描かれることがありました。長町周山という一八世紀の大阪派の根付師の作品からは、最も普通の鍾馗の姿を見ることができですが、それでも、その顔は恐ろしい顔つきでありながら、どこかしら滑稽な面影を残しています。

一九世紀になると、相変わらず鬼と鍾馗という題材に人気がありましたが、鬼が鍾馗を小馬鹿にしているような表現が多くなります。

たとえば、無銘の一九世紀の根付には、好奇心旺盛な鬼が、巻いてある掛け軸の絵を見たいと思いました。それで、掛け軸を広げてみます。すると、そこには鍾馗像が描かれていました。絵の中の鍾馗が鬼を討とうとして剣を振りあげます。ところが鬼は、鍾馗よりもすばやく掛け軸をするすると巻き始め、鍾馗を掛け軸の中に閉じこめてしまうということです。

さて、中国から伝わった人物以外にも、しばしば根付に登場する人物がいます。源頼光がその人です。この人物は平安時代の人でしたが、「四天王」の伝説と深い関わりがあります。たとえば渡辺綱は立派な武者でした。「羅生門の鬼と渡辺綱」は有名な物語です。この出来事については、江戸時代に、能や芝居、あるいは講談師の語りとして人々に広く知られました。

鬼と渡辺綱の戦いの物語をちょっと紹介してみましよう。恐ろしい鬼が京都の「羅生門」のあたりに住んでいると聞いた渡辺綱は、夜になると羅生門へ向かいました。そして、門の前まで来ると、まず、門柱に自分の名前を刻みました。彼が、夜、この恐ろしい場所に来たということを人々に納得させるためです。やがて深夜になると、闇のなかから巨大な鬼の手が現れました。渡辺綱は少しもうろたえることなく、この鬼の手を切り落としました。すると鬼は呻き声をあげながら消え去りました。その後、渡辺綱は切り落とした鬼の手を持ち帰りましたが、誰にも見せることはありませんでした。ところがある日、老婆が訪ねてきて「あなたの乳母です。是非、鬼の手を見せて欲しい」と懇願します。それで、ついに、渡辺綱は鬼の手の入った箱を取り出し、蓋をあけて見せてやります。すると、みるみるうちに老婆の姿が鬼に変わり、切り落とされた手をつかむと、疾風のごとく



消えてしまった、というお話です。

しばしば、先ほどの羅生門の鬼の話が根付に表現されています。ここに小さい鬼がいますが、これは、腕を切り落とされた巨大な鬼（親鬼でしょうか）の痛みを嘆いています。渡辺綱は歴史的な人物です。根付は伝説だけではなく歴史的事実も伝えていることがわかります。

根付では、南蛮人もよく題材になります。だいたいが無銘で、一八世紀頃に作られたと思われますが、どこで作られたかはよくわかっていません。私の考えでは、南蛮人の根付は長崎の根付師によって作られたのではないかと思います。なぜなら、この根付が多く作られた時代に、南蛮人すなわち、ヨーロッパ人を見ることができたのは、長崎の人しかいなかったと思うからです。

町人の文学の好みも根付に反映されました。彫刻家は、いろいろな小説の場面を根付に表現しましたし、また、作家自身の姿もあらわしました。

大阪派の根付師、周公斎安樂の作品には小野小町が描かれています。小野小町はみなさんもよくご存じの通り、平安時代初期の有名な歌人で、六歌仙の一人です。また、たぐいまれな美人として有名でしたが、この小町像を見ると、彼女の

美しさには疑問がわいてきます。これは、「卒塔婆小町」というテーマです。同じ名前の能の演目があります。

根付師は日本文学だけでなく、中国のモチーフも用いました。このモチーフの中には時として分り難いものもあります。

小さい猿が大きなワシの爪に捕まえられている根付があります。しかし、この情景をもう少し深く見てみると、違う主題が見えてきます。どういふことかと言うと、わたしには、これは、江戸時代に流行した中国伝来の『西遊記』に関係があると思います。孫悟空と巨大な鷲との戦いの物語を表現していると思えます。

根付には、よく動物が登場します。いろんな動物が描かれてましたが、とくに牛とか馬、蛇とか、虎、うさぎ、龍などが多くみられます。どういふ動物たちであるか、もうお気づきでしょう。十二支に登場する動物です。根付では、その持ち主の生まれ年、干支の動物が好まれたようです。それは、十二支の動物を描いた根付がお守りとして、その持ち主に十二年にわたって幸せと恵みをもたらすという意味を持っていたからです。

根付がお守りだったという証拠はほかにもあります。

たとえば、これは所謂「鯰根付」です。ナマズは古くから地震の魚として知ら

れています。言い伝えでは、駿河と鹿島の間の海底に大ナマズがいて、普段は鹿島大明神がこのナマズを封じ込めているのだけれども、時々この大ナマズが暴れて、それで地震が起こるというわけです。そういうわけで、ナマズは地震と非常に深く関係します。たとえば、有名な鯰絵というのがありますが、これは安政年間地震が起った関係で出版されたものです。同じことが根付にも言えます。どういうことかと言いますと、ナマズの根付は、地震に対するお守りの役目を持っていたわけです。同じような推察がほかのいろいろな根付についても考えられます。それにしても根付は日本本来のお守りだったとは思えません。

私の考えでは、理由はこうです。前にも述べましたように、根付の原型は中国の墜子、あるいは佩陞でした。これは、中国では初めから少なくとも一九二〇年代までお守りとして用いられてきました。根付は中国のファッションとして日本へ輸入されました。早い時期の根付の主題が例外なく中国のものであったことからよく理解できると思います。そういうわけで、当初は、中国と同様に日本でもお守りという意味あいが強かったのです。これは、当初の根付の主題が、全部お守りとしての特徴を持っていることから分ります。しかし、時代が進むに従って、町人文化のなかに溶けこみ、発展していったことにより、新しい方向を得ま

した。それは、生活につながるテーマと、笑い、滑稽につながるテーマです。そして次第に当初の根付のお守りとしての意味あいが薄れていきます。

実にこのあたりの文化論は複雑で興味深いものですが、この点については残念ながら今日は詳しくお話する時間ありません。

これまで述べてきたとおり、七福神とか、仙人とか、十二支とか、他のいろいろの主題が守護・恩寵・恵みの意味を持っていたことはおわかり頂けたとおもいます。しかし、ときどき、ちょっとおかしい根付を見つけることがあります。月山という一九世紀の名古屋の根付師の作品には、馬と鹿が描かれている。馬と鹿という漢字を並べたら「バカ」という言葉になります。ここには恵みの意味はありませんが、滑稽、洒落を表現した根付と言うことができますと思います。

これは根付の主題の僅かな部分ではありません。今回は一番面白く代表的なのを選ぶことにしました。

次に、根付師の流派についてお話したいと思いますが、その前に根付の特徴について少し申し上げたいと思います。

私の考えでは根付の一番重要な特徴は目だけでなく、手でも知覚されることです。この手探りの知覚は根付の形に特別な要求を提出しています。すなわち鋭い

角がなく、丸味のある形をもっているはずですが。しかし、かならずしも滑らかではないです。すなわち根付の形は簡単ですが同時に多種多様です。このような理由でかくも優れた根付の彫芸術が発達したかもしれません。この彫りの芸術こそ根付独特の特徴であると思います。

根付師の流派について先ず大坂派の事をすこし申し上げたいと思います。

大坂派には最初、大きいスタイルが現れました。それに我々の知っている一番古い根付師の名前は大坂の人の名前です。一八世紀の終わりまで大坂はもっとも重要な彫刻の中心地でした。

エルミタージュのコレクションの中で落款のある一番古い大坂根付は院幣丸雲樹洞の「風神」であります。

雲樹洞という根付師の名前は『装剣奇賞』に述べられています。この方は神主であり、天明期（二天保一）に大坂に住んでいました。

幣丸は特別な注文だけに応じて根付を製作したので、今まで僅か二、三の作品しか知られていません。エルミタージュには一つだけ保存しております。

この根付は木製の大きなサイズの作品で、一八世紀の大坂派のスタイルを代表する物であります。主題はインドに起源をもつものですが、中国を経て日本に入

しました。風神の姿は総体的に、非常に表現的に描かれ、表面には何の飾りもありません。この根付のすぐれた表現力は、巧みな体積の結合によって達成されています。

彫刻は台座の上に置かれていません。以上に述べたことが、初期の大坂派の特徴です。

後期のもっとも有名な大坂派の代表者は懷玉齋正次（一八三九）です。

この根付師は大坂派の中で一番偉い人です。大坂に特別な懷玉齋会がありました。この方は独立した彫刻家であり、誰をも真似ず、独自のスタイルを生み出しました。懷玉齋の様式は多種多様です。エルミタージュには彼の根付がただ一つあります。これは「鯰」の形です。「懷玉齋」という落款があり、サイズは非常に長く、一五センチもあります。これはとても面白いものですが、これだけでは懷玉齋の創造したものの全容を理解できません。もっと詳しい調査のためには東京国立博物館を訪ねた方がいいと思います。

私の考えでは、この根付は安政時代に作られた物です。「なまず」の描写は安政時代にお守りとして版画や根付に広く作られていました。

次は京都の流派です。

エルミタージュの一番古い京都の作品の一つは正直の「脹雀」(福良雀)です。これは正直の大好きなモデルで、このような描き方の作品が沢山ありますが偽物も沢山。この根付は本物か偽物か、ちょっと疑問があるところですが、本物の可能性も大きいと思います。

同時にこの根付は一八世紀の京都派を代表するものです。

当時、京都ではいわゆる「野獣」のスタイル(*beast style*)が普及していました。この創始者は友忠、岡友と正直でした。このスタイルの特徴はいろいろな動物、鳥と魚の独特な描出でした。この特色は特徴の総括的表現と言えます。動物の姿態の表現は主にシルエットで作られていました。このような京都派根付の特徴は京都版画、上方絵のスタイルに直接の関係があるかもしれません。

この根付は本物かどうかとの疑問があるとすれば、次の根付に対しては疑問はまったくありません。友忠の落款があっても偽物にちがいない。この「牛」の姿は友忠の一番人気のあるモデルでした。これの偽物は京都だけではなくて江戸でも作ったことがあります。

一九世紀には京都派のスタイルが変わりました。当時の最も有名な根付師の一人は蘭亭でした。

エルミタージュ美術館所蔵の根付「布袋」の姿は、傑作ではなくても蘭亭のスタイルをよく反映しています。

蘭川は蘭亭の門人でありました。この人のエルミタージュ所蔵の「虎」の根付は、蘭川と当時の京都派にとってはちょっとした傑作です。これは木製ですが當時京都派は普通象牙を用いていました。

いろいろな無銘の根付も間違いなく京都の根付師により作られました。たとえば「蛇」です。落款がなくても蘭亭自身、あるいは蘭亭の門人の一人によって彫られたものです。(図) ブシエル氏のコレクションには同じモデルが保存されています。)

一八世紀末に他にも無銘の根付も作られました。「虎」のモデルです。

一九世紀中期に秀正珍玄堂という根付師が活躍していました。「猿と鷲」のグループは彼の作品のよい見本です。たぶん『西遊記』からの主題で、猿は孫悟空だと思います。

「宮殿」を形どった根付は無銘ですが、様式の点から見れば影利と関係があるかもしれません。このような細密な建築を主題にした根付は影利の一番好きなモデルでした。



蘭亭と蘭川、秀正と影利の根付を京都派の創始者の作品と比べたら、スタイルの違いはすぐはっきりと分かります。

京都派においてこのような変化を引き起こした理由が幾つかありました。しかし、私の考えでは、一番重要なのは当時一番はやっていた江戸派の影響です。

一八世紀末から一九世紀の初期に江戸派は根付の世界のファッションの唱導者になったからです。

これから江戸派のお話をしましょう。

普通、江戸派と呼ばれているものの出現は、三輪という根付師によるものとされています。三輪を名乗る根付師には三人いたことが知られていますが、時々、この三人のすべてが一八世紀に活躍したと論じる方もおられます。しかし、わたしは、少なくともこのうちの二人は一九世紀に活躍した人物であると確信しています。

エルミタージュ美術館には、たくさんの三輪制作の根付があります。

その一つに「盲人」があります。これには、三輪というサインと書判があります。この様式とサインから、これは三輪一代の作であると推測できます。専門文献によると、三輪一代の作品は、細長くて大きいことがその特色にあげられてい

ます。たしかに、そのような特徴をもつ三輪一代の作品が数多く知られています。同じ三輪一代でも例外的な作品もあります。また、三輪には、一代、二代、三代、四代とありますが、ほかにも数人の三輪を名乗る根付師がいたことも事実です。しかし、この作品は通常の判断をもってしても、三輪一代の作であると断言できると思います。

「天鈿女命と天狗面」と題した根付は、三輪二代の作品と思われます。木製の彫刻ですが、いろいろな象嵌が用いられており、これは三輪二代の代表的な特色と言えます。

三番目の三輪の作品をご紹介します。これは、間違いなく一九世紀のもので、たぶん三輪三代だと思えますが、この頃の作品は古いモデルを好んで使います。東京国立博物館に三輪一代の同じようなモデルが所蔵されています。

三輪の作品のみならず、三輪派の根付がエルミタージュ美術館には沢山ありますが、大部分のものは無銘です。

ごらの作品「按摩」「背搔男」は、三輪派の根付師の作品です。三輪の代表的な主題を用いた小さな木製の根付です。

一九世紀江戸派にもいろいろな流れがありました。最も重要と思われるのが友

親派でした。この流派の創始者は山口友親です。

このスライドは「文福茶釜」、他、山口友親の三つの作品を見ることができます。友親は、一九世紀後半に大変人気のあった彫刻家でした。彼は、根付だけでなく象牙の置物なども彫りました。友親の門人は非常にたくさんいて、そのなかでも一番面白い彫刻家に秀親がいます。このスライドは、エルミタージュ美術館所蔵の秀親の作品のなかでも最も優れた作品の一つで「踊っている天鈿女命」です。日本では、普通このようなものを阿福、お多福、オカメと呼んでいるようですが、私の考えでは、これはあの有名な『古事記』の主題、すなわち天の岩屋の前で、天鈿女命がエロチックな踊りをおどったという場面だと思います。

幕末から明治初期の頃、もう一つの大きな流れが江戸派に現われます。それは浅草派です。この創始者は谷斎でした。

谷斎の作品、並びに浅草派の特徴は、象牙や木を彫るのではなく、主に鹿の角で根付を作ったことです。特に述べておきたいのは、たいていの根付師は町人であったのに、谷斎が旗本だったことです。彼がどういう理由で根付の制作を始めたのかは不明ですが、浅草に住みつき、非常に特徴のある根付を作りました。

私の意見では、一九世紀の中頃から後半にかけて、江戸派の最も面白い彫刻家

は、榎立東谷です。エルミタージュ美術館には彼の作品が二つありますが、ご覧のスライドはその一つ、「寿老人」です。いろいろな根付の専門家が東谷の作品について、出来、不出来、いわゆる品質が異なると書いていますが、この「寿老人」の姿には、東谷の良さを顕著に見ることが出来ます。小さい木製の根付ですが、実に八つの種類の象嵌がほどこされているのです。スライドではよく見えないのが残念ですが、象牙、いろいろ象牙、いろいろ鹿の角、さんご、螺鈿、金漆、赤漆、赤銅です。この細かい細工を発見することは、実に楽しいことです。

「寿老人」の隣は、東湖という根付師の作品です。ヒガシにミズウミという漢字を書く名前から、おそらくヒガシにタニと書く東谷の門人でしょう。東湖も東谷と同じ手法を用いました。主題は、「かぼちゃの上のかたつむり」です。そして注目したいのが銘で、発句になっています。「かみなりと、じしんもかつぞ？ かたつむり」と書かれています。

最後に、根付を代表する形の一つに「鏡蓋」があります。R・ブシエル氏は、「鏡蓋」様式は、江戸後期に初めて現れたと書いています。また、マイネルザゲン氏は「鏡蓋」の歴史を一八世紀前半からとしています。しかし、とにかく面白い作品は一九世紀中頃に集中的に作られました。有名な「鏡蓋」根付の作家は天民

で、その代表的な作品に、「掛け軸を眺めている閻魔王」があります。これは、天民が自分の門人である立民と一緒に作ったもので、裏面に二人の落款が認められます。

今回、私は三つの流派の根付について話しましたが、エルミタージュ美術館のコレクションは一六流派の作品を含んでいます。

このコレクションは古いもので、他の古いコレクションと同様に、新しいコレクションとは違った特徴があります。新しいコレクションはだいたい傑作だけかなくなっており、一番有名な根付師の作品ばかりです。この収集の方法は正しくないと思います。

まず、落款なしの根付にはしばしば、えらい根付師の作品と劣らぬものがあります。

それに、美術史の視点から見れば、並の作品を知らずに詳しい根付の歴史や根付の特殊性を理解することは出来ません。

したがって、根付の傑作だけの研究はむだなことにほかならないと思います。

現在、根付の総り豊かな研究のためにふさわしいコレクションはわりあいになく、たとえば、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館と大英美術館の根付

コレクションがあります。エルミタージュ美術館のコレクションもこの部類に属しています。

注

本文で触れた作品の図版は国際日本文化研究センター別役恭子寄附研究部門教授の海外日本美術調査プロジェクト報告『エルミタージュ美術館所蔵日本美術図録』（日文研叢書2、一九九三）に収録されている。

根付師

寿之	懷玉斎正次	蘭川	出目右満	榎立東谷
長町周山	正直	秀正珍玄堂	山口右親	東湖
周公斎安楽	友忠	影利	秀親	天民
院幣丸雲樹洞	蘭亭	三輪	谷斎	立民

\*\*\*発表を終えて\*\*\*

私が根付の研究を始めたのは、ロシアで美術アカデミーを卒業した直後でした。当時、ロシア語の根付に関する文献は殆どありませんでした。一方、エルミタージュ美術館には沢山の根付のコレクションがありましたが、私が手をつけるまで誰もこのコレクションを研究する人はいませんでした。私にとって根付は単なる工芸品というよりも、特別な種類の彫刻でした。根付は小さいけれども、ミケランジェロの彫刻と同様の原則で作られているのです。私は最初にエルミタージュ美術館の根付のコレクションの図録を作り、次に博士論文で取り上げ、根付についての本を書きました。そして私の準備した根付コレクションの二つの展覧会は大成をおさめました。その時から「ネツケ」は「サムライ」や「ゲイシャ」と同様にロシア語となりました。

エルミタージュ美術館所蔵の根付コレクションは、世界三大コレクションの一つです。現在、東京には根付の研究会があり、世界を廻って各地の根付コレクションを研究しています。私はこのことを日本の専門誌「目の眼」で知りました。このように今では日本でも根付についての興味が高まったようなので、ぜひ一度エルミタージュ美術館の根付コレクションについて、日本の皆様にお話したく思っております。今回、日文研フォーラムで発表の機会を得たことを大変嬉しく思っております。コメンテーターをつとめて下さった日文研の別役恭子先生に感謝しております。有難うございました。







日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコワント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都ーケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) J ürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシュ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリーア美術館 ー米国の日本美術コレクションの一例としてー」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践ー有島武郎の場合ー」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 ー旧身分文化との関連を中心としてー」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 ー科举制度をめぐるー」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語りー平安朝文学の特質ー」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5. 10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIW0 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6. 10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7. 12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」



67	6. 9. 13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6. 11. 15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6. 12. 20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1. 10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2. 14 (1995)	嚴 紹 璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3. 14 (1995)	王 家 驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」王
73	7. 4. 11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7. 25 (1995)	崔 吉 城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9. 26 (1995)	蘇 徳 昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
78	7.10.17 (1995)	李 均 洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリユーシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1. 16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

82	8. 2. 13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
----	--------------------	---

○は報告書既刊

\*\*\*\*\*

発行日 1996年2月20日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

©1996 国際日本文化研究センター



■ 日時

1995年 1 月10日

午後2時～4時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

